甲府一高新聞
4月号
発行所
甲府一高新聞部
甲府市美咲二丁目13-44

201人の新しい顔ぶれ

高校生としての第一歩を踏み出す

令和7年度入学式が4月9日、本校体育館で行われた。式には新入生、保護者、来賓、職員が出席した。普通科151人、探究科50人、計201人が新たに一高生の仲間入りを果たした。

保護者や来賓の多くの方々に見守られる中、緊張した表情を見せながら、これからの一高に新たな息吹をもたらすであろう新入生が入場した。国歌斉唱の後、飯島清樹校長

【 誓いの言葉を述べる辻光翔さん 】

先生による入学が許可された。式辞では「今まで築かれてきた一高の歴史と伝統を引き継ぐ自覚を持ち、仲間と切磋琢磨しながら有意義な三年間にしてほしい」と述べた。加えて、校是の『日日新、日日新、又日新』にもあるように自己研鑽に励むこと、読書を介した知識の活用を重ねることを胸にとどめて高校生活を送ってほしいと話し、新入生を迎えた。新入生の誓いで代表の辻さんは、「今まで以上に自身の選択に責任と自主性が求められる中でも、協力し合う仲間と家族、学校の先輩や先生方への感謝を忘れずに進んでいきたい」と決意を表した。

閉式後には、ア・カペラ部や生徒自治会役員により、校歌が披露された。入学式が終了し、新入生が向かった生徒玄関前では部活動勧誘が行われていた。新入生は「アーチェリー部で中学生からのライバルと戦いたい」「今まで以上に部活動と勉学の文武両道に励みたい」「部活で一年生から活躍したい」と部活動のチラシを抱えながら思い思いの意気込みについて語った。

新しい環境を前にして生まれる感情は期待感だけではないはずだ。ここでしか出会えない仲間や経験が一高にはある。在校生一同、新たに仲間となった新入生を心から歓迎し、不安や心配も糧にしつつ、実りのある三年間を送れるよう共に励んでいくつもりだ。

【 鋭い目線を送る羽田委員】

得魚忘筌

校長　飯島　清樹

標題の四字をどこかで見たことがありますか。わかった人は観察力が優れていますね。そう、これは視聴覚室内に掲げられている書です。石橋湛山の筆による書ですが、「昭和辛卯」とあるので、だいぶ古くからあるものになります。読み方は、「魚を得て筌を忘る（うおをえてせん）」です。〈「うえ」とも〉をわする）」です。「筌」というのは、魚を捕るための道具のことです。魚を得てしまえば、魚を捕らえるための筌は不用になり忘れてしまうとの意から、目的を達成してしまうと、それに貢献したものやひとの功績は忘れてしまう、というたとえです。出典は『荘子』という中国の漢籍から。

上で示したような意味に、もう一つ私流に解釈をつけくわえると、目的なくして手段はなく、手段にだけかかずり合って本質を見失ってはならない、という教訓にもつながると思います。時に一生懸命取り組んでいると手段が目的になってしまいます。たとえば、パソコンは道具・手段であって目的ではないのですが、パソコンを使うことが目的になってしまうと、本来何をしようとしていたのか忘れてしまいます。大きな取り組みをするときには、時折立ち止まり手段と目的をチェックする必要があるでしょう。皆さんの場合で言えば、問題集をやることが目的になり、何を学ぶのかということが置き去りになってしまったことがあるのではないでしょうか。ドリルや問題集の意味をかみしめながら、眺めていただけると大先輩が筆をとった意味がでてくるかと思います。

ソコンを使うことが目的になってしまうと、本来何をしようとしていたのか忘れてしまいます。単に先生から出された課題だからと取り組むのではなく、やはり何のために取り組むのかという目的は見失ってほしくないところです。

「得魚忘筌」

手段か目的か、学ぶ者の戒めとして意識してほしい言葉の一つです。視聴覚室に立ち寄った際には、言葉の意味をかみしめながら、眺めていただけると大先輩が筆をとった意味がでてくるかと思います。

それをやるのかが、見えなくなって言わば作業になってしまいます。単に先生から出された課題だからと取り組むのではなく、やはり何のために取り組むのかという目的は見失ってほしくないところです。

「得魚忘筌」

手段か目的か、学ぶ者の戒めとして意識してほしい言葉の一つです。視聴覚室に立ち寄った際には、言葉の意味をかみしめながら、眺めていただけると大先輩が筆をとった意味がでてくるかと思います。

應援練習

途切れることのない一高魂

応援練習が本校体育館にて4月14日、15日の2日間にわたり行われた。今年度は、練習する応援歌を増やしての実施となった。先輩たちに先導され、一年生は気が引き締まった面持ちで入場した。1日目は、応援委員による校歌と一高伝統の応援歌「希望の光」「起て撃て勝て」などが披露された。その後、一年生も練習に加わり、慣れない中でも熱心に取り組んでいた。2日目は、1日目の成果を確認した後「一高アトム」や「突撃一高」「チャンス一高」と様々な応援歌の練習をした。応援委員に指摘されたポイントを意識し、声が枯れるまで張り上げていた一年生と、春休み中から練習を重ねた応援委員や吹奏楽部の演奏が相まって、迫力のある練習となった。

【　応援委員に応える一年生　】

練習を終え、一年生は先輩方の気迫に圧倒されたが、練習を通して前よりも自分に自信がついたや、これが一高の応援練習かと感じ、一高生になった気がしたと話した。応援団の迫力に飲まれた時もあったが、自分と向き合うことで一高生の自覚が芽生えていた。応援団長の小池陽翔さん（三年）は、練習の最後に、応援練習を通して声の出し方から自主性まで、一年生から多くの成長を感じ取れた、と語った。また、一高は何でも一番だから「一高」なのだと総括した。長い歴史を誇る応援練習を今度は受け継ぐ側になった一年生が、その意義と覚悟を自分なりに考えるいい機会となった。

【型を見せる小池団長】

我らが精鋭

1学年主任・英語科
矢崎　芳生　先生

天国に一番近い島

もうだいぶ昔のことです。「天国に一番近い島」という映画がありました。原作・森村桂、監督・大林宣彦の作品です。友人か彼女と、甲府の映画館で観たのだと思いますが、定かではありません。内容は…ある少女が父を亡くし、幼い頃父から聞いた「天国に一番近い島」の話を思い出す。その場所がニューカレドニアにあると思い訪れるが、なかなか見つからない。結局見つけることができず、日本に戻ったあと、実は自分の住んでいる場所（東京）が「天国に一番近い島」であることに気づく、という感じです。なんてことのない映画で、特に感動したわけでも思い出になっているわけでもありません。ただ、「天国に一番近い島」とは、何とも響きがいいと思いませんか？

君たちの「天国に一番近い島」は、どこにあるのでしょう。私の場合、それは大学のキャンパスであり、同時にそこで過ごした日々でした。お世辞にも楽しい学生生活とは言えませんでした。英語の授業はレベルが高く、クラスでは落ちこぼれでした。バレーボールもサークルではなく体育会だったので、練習もきつく、ついていくのが精一杯でした。住んでいた寮（3人部屋で、1人は留学生）では他と生活する難しさも味わいました。家からの仕送りもわずかで貧しく、普通の大学生が楽しむものの多くを経験することができませんでした。しかし、それすら自らのエネルギーに変えることができました。取り巻く全てのものを吸収しようともがき、必死で生きて、疾走できた時代でした。今でも甘く切なく胸に甦ります。戻れるのなら悪魔に魂を売ってもいいとさえ思います。

みなさん、はじめまして。一学年主任の矢崎です。甲府一高は君たちにとっての「天国に一番近い島」になることができるのでしょうか？あるいは、卒業してからどこかで見つけるのでしょうか？いつの日か振り返って、それを教えてください。

傍若無人

水たまりが鮮やかな桜色を反射しているのを見かけると、春を感じる。桜は、日本の春の代名詞だ。花見と称して日本人が初めて桜を愛でるようになったのは平安時代にまで遡る。唐から梅見の文化を取り入れ、平安時代になってその対象が桜へと変化したのだ。貴族が桜の木の下で詠み合った歌が今もなお多く残っている。その後鎌倉時代・江戸時代と進むにつれて、桜見の風習は庶民にも広がり、皆で団子や弁当を楽しみながら桜の花びらが舞う様子を眺めていたそうだ。今から約1200年前の人々も私たちと同じように桜の花を見上げていたのだろうかと思うと脈々と息づいていることが感じられる。

暖かくのどかな雰囲気とは裏腹に、春は激動の季節でもある。新たな出会いがあり、新たな生活が始まる。期待に胸を膨らませ、心機一転初めての分野に挑もうと意気込むあまり、つい焦ってしまう人もいるかもしれない。せわしなく過ぎていく季節だからこそ、代々受け継がれてきた花鳥風月やふとした瞬間を美しいと感じる心と時間を大切にしていきたい。

〈甲一新聞部員〉
髙橋　玲衣　坂江　和香
山本　滉　伴野　朱香

新聞部員急募!!!
☆各種大会への出場実績アリ
☆兼部も可能なので安心
☆入部希望者は進路指導室の北村先生まで